十和田湖に残る信仰の歴史

風光明媚な自然の景勝地として北東北を代表する観光地である十和田湖。しかし、この十和田湖がカミの住む山として北東北一帯から人々の信仰を集めていたことを知る人は多くはありません。

十和田湖はかつて神仏習合（※）の神「十和田青龍権現」が住むと信じられ、各地から**あらゆる願い事をもった参詣者**や、聖なる力を得ようと修行する**修験道の行者**が訪れる場所でした。

その聖域はカミの住む十和田湖を中心に、それを取り囲む外輪山の山々全体であり、その聖域を総称して我々は「霊山十和田」と呼んでいます。

（※）日本または地域古来の自然信仰（神）と仏教を融合させた宗教思想のこと。

霊山十和田の規模

霊山十和田は北東北一帯からの信仰を集め、その認知度も 1400 年代初頭（室町時代）に**近江国(滋賀県)の僧がまとめた説話集「三国伝記」**に十和田青龍権現のご縁起である**「十和田湖伝説」が北日本で唯一紹介**されていることから、全国的な知名度を持つ霊山であったと考えられています

霊山十和田の今

明治時代初期の神仏習合の禁止をきっかけに、近代化とともに霊山十和田の影響力は薄れていきました。

しかし十和田湖畔には**信仰の跡が多く残されており**、現在でも歴史をたどり、祈り、占い、願い事をしたかつての姿を追体験することができます。

伝説の主人公“南祖坊”

十和田湖に伝わる伝説では十和田青龍権現は南祖坊という僧の生まれ変わりであると伝えられています。

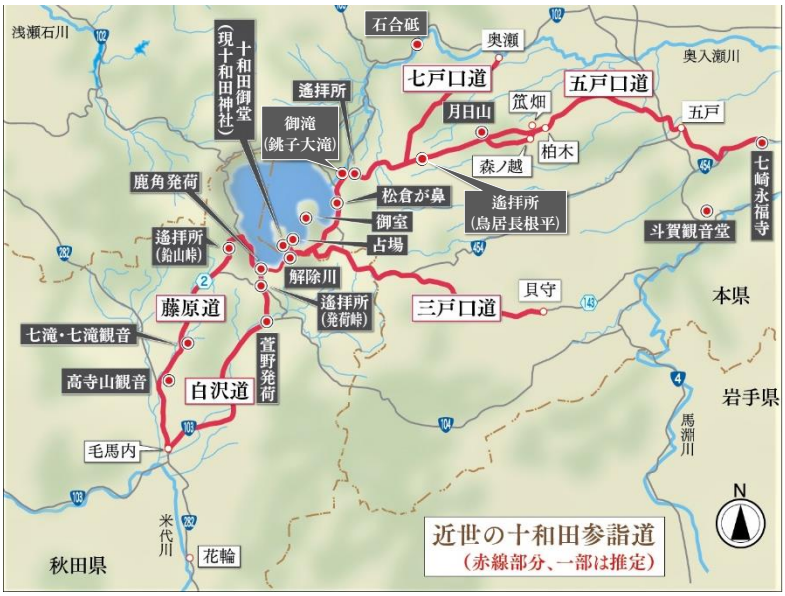
この南祖坊は様々な言い伝えがあり、霊山十和田の内外に多くの南祖坊関連の地が存在しています

十和田湖へ続くいにしえの道

江戸時代まで主に使われていた十和田湖へ至る霊山十和田参詣の道を「十和田古道」と呼んでいます。

基本的に山道や尾根道を伝い、川や滝などがある結界（聖域との境界）で身を清めたり、霊山十和田の姿を遥かに望み拝んだりしながら、現在のホテル十和田荘周辺へたどり着くルートになっています。

2019 年から本格化した調査でその全容は徐々に明らかになっており、2021 年現在では 6 つの十和田古道の存在が確認されています。



五戸口道： 七崎永福寺（八戸市豊崎町）を起点とした 1829 年の案内記にも紹介されているメインルート。1690 年前後に大規模改修工事も行われ、その記念碑が十和田湖畔子ノ口に現存しています。

七戸口道： 北海道の名付け親「松浦武四郎」が「鹿角日誌」に記録を残している道。十和田御堂別当宅があった奥瀬（十和田市奥瀬）が起点となっています。

三戸口道： 貝守（三戸町）を出発し、現在の宇樽部トンネル周辺で合流するルート。現在調査中のまだまだ未解明な道です。

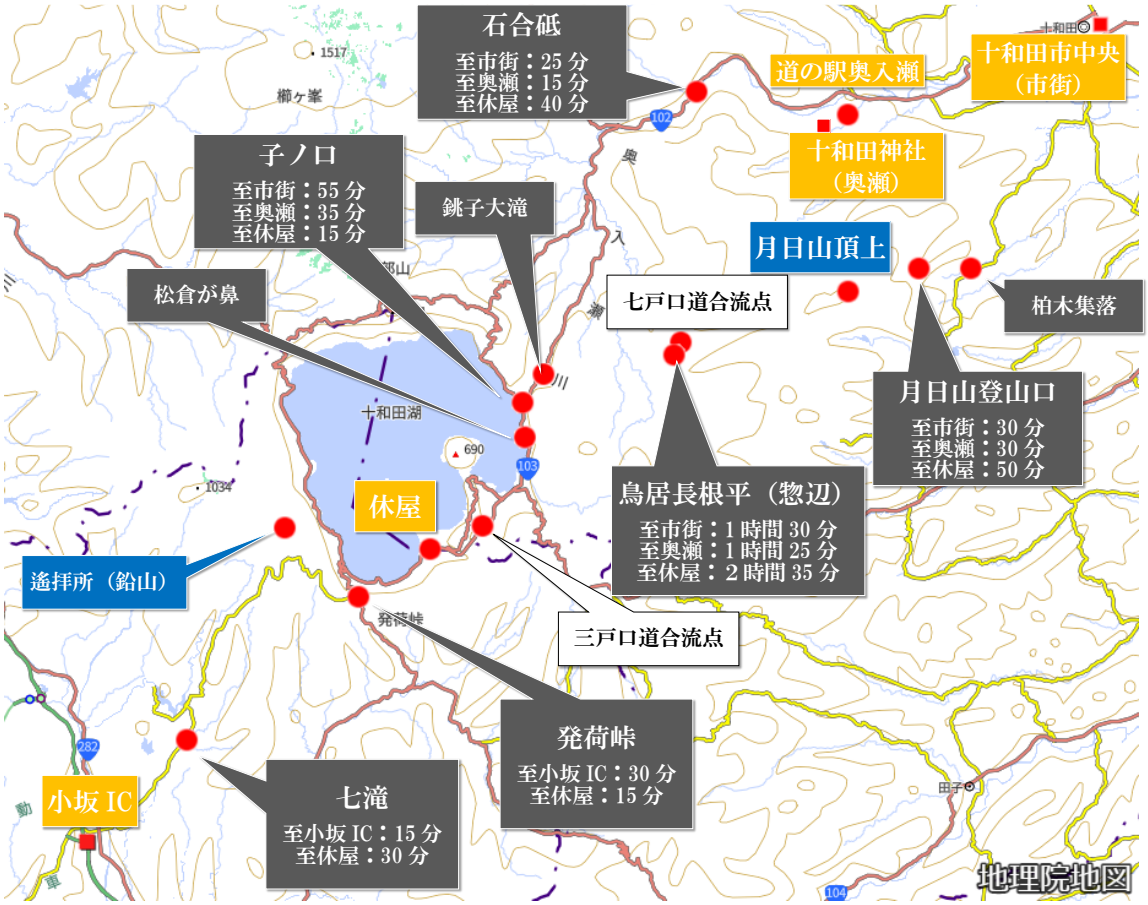
藤原道・白沢道： 秋田県鹿角市毛馬内を起点にした道。藤原道はおおよその道が現在の道として利用されており、要所へのアクセスは現在も容易な道です。

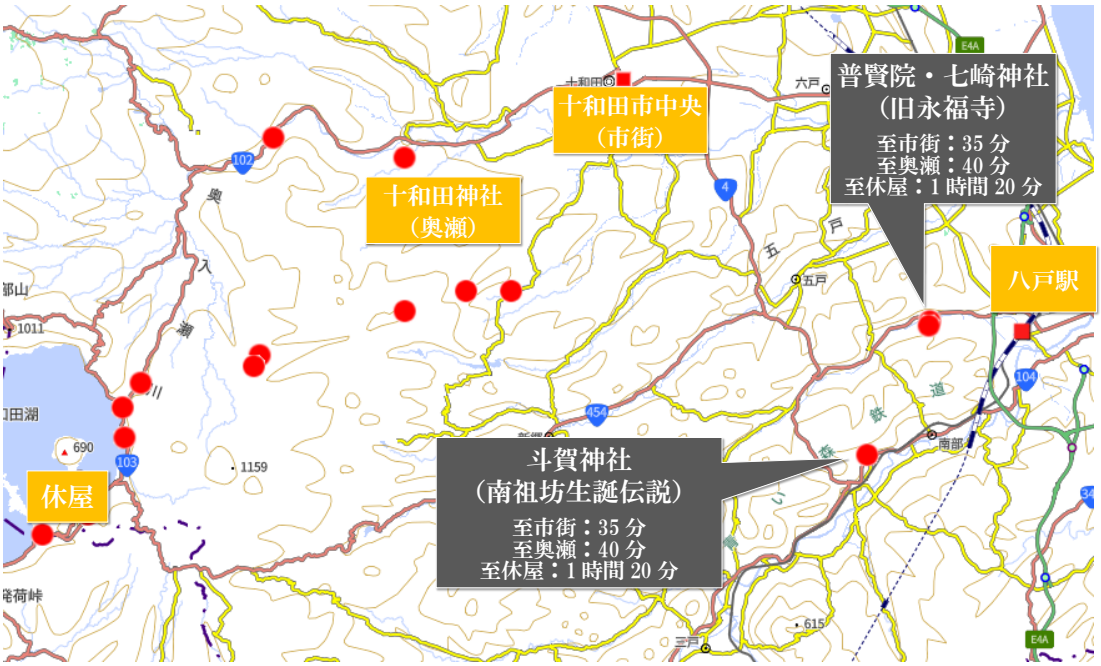
第六の道： 石合砥（十和田市法量）を起点に奥入瀬渓流を通るルート。2020 年の調査で新たに加えられた道で、駒止（馬門橋）以降は修験者のみが行く修験の道と考えられています

十和田古道の基礎③

十和田古道のスポットマップ

十和田市・小坂町



※青色箇所は要登山（月日山頂上＝２時間程度、鉛山＝５０分程度）

八戸市側